

四一三 眞実無所得にて利生の事をなす (流布本三一三)

また人のために善き事を為して、彼の主に善しと思はれ悦びられんと思ふてするは、悪しきに比すれば勝ぐれたれども、なほ是れは自身を思ふて、人のために実に善きにはあらざるなり。主には知られずども、人のためにうしろやすく、乃至未來の事、誰がためと思はざれども、人のためによからん料の事(料事流布本)を作し置きなんどするを、眞に人のため善きとは云ふなり。

況んや衲僧は是れには超へたる心を持つべきなり。衆生を思ふ事親疎をわかたず、平等に濟度の心存じ(存し流布本)、世、出世間の利益、都て自利を憶はず、人に知られず主に悦ばれず、ただ人のため善き事を心の中になして、我れは是のごとくの心もちたると人に知られざるなり。

この故実は、先づすべからく世を棄て身を捨つべきなり。我が身をだにも眞実に捨離しつれば、人に善く思はれんと云ふ心は無きなり。然れどもまた、人は何にも思はば思へとて、悪しき事を行じ、放逸ならんはまた仏意に背く。ただ好き事を行じ人のためにやすき事をなして代りを思ふに我がよき名を留めんと思はずして、眞実無所得にて、利生(先生長円本)の事をなす、即ち吾我を離るる第一の用心也。

この心を存ぜんと思ふ先づすべからく無常を念ふべし。一期は夢のごとし。光陰移り易し。露の命は待ちがたうして、明るを知らぬならひなれば、ただ暫くも存じたるほど、聊かの事につけても人のためによく、仏意に順はんと思ふべきなり。